神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Come and Gone with the mild wind

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安達, 隆一, Adachi, Ryuichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1633

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

想い出の記

安達隆一

1981年4月，私は神戸市外国語大学に赴任した。楠ケ丘の旧学舎である。1959年4月大学院進学のために神戸を離れて以来，22年ぶりのことであった。

日本語学課程担当教員として「日本語学第2」「日本語研究史」を講じるというのが私の資格条件である。講義を担当して困惑したのは，「日本語学課程」の概念がよく分からないことである。卒業単位に一切関係ないとすれば，教職課程に比定できる。ところが免許取得には無関係であることにおいて，決定的に相違する。専任の担当教員は私を含めて二人である。日本語学課程委員会が存在し，その委員長の職務が早々に私に課せられた。設置の目的，大学での位置づけ，将来の構想などすべてが不明のままに，私は講義と委員会を主宰する羽目になったのである。

赴任して2年目の1982年は，私にとって，それ以後の生き方を大きく転換するに至る激動の年になった。

2月父が急性心筋梗塞にて急死した。思えば父とはゆっくり言葉を交わしながら暮らしたという思い出はない。父の残してくれた財産は，同じ研究者の道を選んだ私に，国語学を専攻することを進めてくれたことと，英語は英語の語順に則して理解するべきだと説き，英語への開眼をはかってくれたことである。神戸市外国語大学に職を得てこれから同居しようと思っていた矢先である。父の住む実家に単身の身を置いて大学に通っていた私は，親族とも相談の結果，実家を実弟に任せることにした。

6月父についで私が急性心筋梗塞に襲われた。朝目覚めと共に指先から腕，胸，背中が硬直し，そのまま筋肉が壊死するような圧迫感を覚えた。妻に症

状を告げて岡崎市立病院に送り込んでもらった。心電図室で心電図を取りながら，医師の診ている目の前で，私は意識不明に陥った。心室細動による心停止である。心マッサージと3回のカウンターショックによって，私は奇跡的に死の淵から生還した。

思えば私は成人以後病気らしい病気をしたことはない。健康と病気については，過信を超えて無知だった。以来「心臓は停まるものだ」ということを実感をもって意識するようになった。2ヶ月半にわたる入院を終えて退院した私は，11月中旬，妻に同伴の援護を頼み，ようやくのことで楠ヶ丘の学舎に復帰した。

この出来事によって，私は神戸に転居する気持ちを完全に喪失してしまうことになる。命の恩人である主治医のもとを離れられなくなったこと，父の不在の実家に未練がなくなったことが主な理由である。暫く逼塞したような研究教育生活を細々と送っていた。

1992年4月神戸市外国語大学大学院に日本語日本文化専攻の修士課程の設置が国際関係学専攻の設置とともに認可される。専攻の支柱に日本語・日本文化とともにアジア言語文化を加えたところにこの大学院の大きな特長がある。これが後年日本・アジア言語文化専攻へと名称を変える基盤である。私が日本語学課程担当教員として赴任して11年の歳月が流れていた。

学園都市の新学舎への移転は大学にとって，既成の理念に変更をせまられるものだったと思う。国際関係学科の設置はその象徴である。私が赴任した頃は，大学が理念の変更を前にして深層において揺れる時期だったのであろう。そして移転とともに，暗黙の裡に大学の将来像を模索する機運が醸成され始める。

日本語学課程について，本学における位置づけを再検討する必要があるという共通認識が教授会において得られることとなる。日本語学課程検討委員会の設置の決定はその意志の具体的実現であった。私は再びその委員会の委員長に任命される。少しずつ体調を回復し，当時は心電図に病気の痕跡を留

める以外に外見上は全く異常はなかった。

委員会は，日本語学課程を日本学科に昇格させ，さらに大学院，付属日本語学校の設置を骨子とする改革案をまとめ，教授会に答申した。しかし，神戸市との政策懇談会において，定員の増員を伴う学科設置は一切認められないとの市長見解により，この構想は撤回せざるを得なくなる。この時，私は密かに神戸市外国語大学を辞することを考えた。

折しも新設の国際関係学科に大学院修士課程を設置する構想が具体化しつつあった。この機会に日本語を主たる専攻とする大学院修士課程の設置の可能性を検討するという発案が学長より私に提示された。教員の増員を見込むことなく，かつ学科を有しないままに修士課程の設置が果たして可能だろうか。日本語学課程を母胎とすること，一名の専門担当教員の増員を計ることで設置が可能であるという感触が得られた。教授会において，日本語学課程検討委員会はそのまま大学院設置準備委員会に移行することが決定され，再び私は委員長の任務につくことになる。

1991年２月私は，大学院設置申請の書類作成を残して，中国天津外国語学院へ交換教授として赴任した。11月に大学院設置申請書類の提出を控え，８月に帰国するという半年の滞在である。中国での生活は満足のいくものであった。私は，中国語の力不足を臆することなく，中国の人々のまっただ中に飛び込んで行った。旅行社の手を一切借りることなく，８月中国での最後の旅行に妻と二人で蘇州に出かけ，言葉にさしたる不自由を感じることなく無事帰宅した時は，いささか感無量であった。中国での生活経験は，帰国後外国人留学生の指導に関する私の価値観に決定的に重要な影響を与えることになる。

1996年４月大学院博士課程文化交流専攻の設置を見る。この前後を期して，私の専攻学生を中心とする日本語研究の体制が満足のいくものに成り始める。能力のある学生が集まり，講義をはじめ研究会，自主ゼミに至るまで質の高い研究指導が可能になった。内部のみならず外部からも好学の者の参加を見

るに至る。そして1999年中国人留学生が博士学位の最初の取得者となった。

1999年3月定年に2年を残して，私は神戸市外国語大学を辞職した。赴任以来18年後のことである。私は，神戸市外国語大学に実に温かく迎え入れられた。そして赴任の時と同じように温かく送り出された。赴任早々急性心筋梗塞に襲われた時に大学から受けた厚情あふれる温かさは，今思い出しても胸が熱くなる。急な退任で，残していく大学院の学生達の将来に関して，何の憂慮も残らぬようにと加重の負担を厭わず意を汲み取って下さった同僚の温かさは，いつまでも私の心に染みついている。私が人に温かく接することができるとすれば，それはすべて神戸市外国語大学で受けた温かさへのささやかな私の返礼である。

1．著　書

『語彙指導の系統と方法』共著　明治図書　1973
『中学校国語文学教材の分析』共著　桜楓社　1980
「言語」（『保育叢書』第19巻所収）　共著　福村出版　1980
『構文論的文章論』　単著　和泉書院　1987
『古代語の構造と展開』　共著　和泉書院　1992

2．論　文

「「天草版平家物語」の表現―助詞「に」「へ」の用法―」（『神戸外大論叢』第36巻第5号所収）　単著　外大研究会　1985
「「掌の小説」の文章について―冒頭部分を対象とする―」（『東海学園国語国文』第32号所収）　単著　東海学園女子短期大学国語国文学会　1987
「日本語史の中の「天草版平家物語」」（『名古屋キリシタン文化研究会会報』第36号所収）　単著　名古屋キリシタン文化研究会　1988
「文章の文法を考える―文章構造の記述について―」（『東海学園国語国文』第35号所収）　単著　東海学園女子短期大学国語国文学会　1989
「係助詞「コソ」の構文史―近代日本語構文の成立に関連して―」（『神戸外大論叢』第42巻第2号所収）　単著　外大研究会　1991
「係助詞『ゾ』の構文史―近代日本語構文の成立に関連して―」（『神戸外大論叢』第43巻第1号所収）　単著　外大研究会　1992

「もう一つの平家物語」(『名古屋キリシタン文化研究会会報』第45号所収)　単著　名古屋キリシタン文化研究会　1993

「天草版平家物語の成立」(『名古屋キリシタン文化研究会会報』第47号所収)　単著　名古屋キリシタン文化研究会　1994

「「書き出し」の文法」(『言葉と教育―八田重雄博士喜寿記念論文集―』所収)　単著　中部日本教育文化会　1994

不于ハビアンと「天草版平家物語」―「コソ」の行方―　(『ことばと文学と書―春日正三先生古稀記念論文集―』所収) 双文社出版　1999)

不于ハビアンと「天草版平家物語」―テクスト・テクスト化・言語資料価値―(『キリシタン論文集　歴史・文化・言葉―　青山玄教授退任記念―　名古屋キリシタン文化研究会　1999)